

## 汽水域研究会 NEWS LETTER

## 第15回秋田大会について

## 汽水域研究会2025年（第17回）舞鶴大会のご案内

汽水域研究会舞鶴大会は、2025（令和7）年10月25日（土）・26日（日）に開催いたします。本大会は、昨年秋田大会に引き続き、汽水域を含む湖沼の生態系や物質循環を考えることをテーマとしています。初日は、舞鶴市商工観光センターにて、シンポジウム「若狭湾の生態系・物質循環」を開催いたします。二日目は、バスチャーターにより、舞鶴湾および天橋立・阿蘇海周辺においてエクスカージョンを行います。なお、一般発表についてはポスター発表のみとなります。

みなさまの奮ってのご参加をお待ちしております。

（事務局長：瀬戸浩二、大会幹事：安藤 卓人）

## 【開催テーマ】

若狭湾の生態系・物質循環

## 【内容】

エクスカージョン、シンポジウム、一般ポスター発表 等

## 【日時／場所】

2025年10月25日・26日 舞鶴市商工観光センター 展示交流室

25日 13時-15時：シンポジウム「若狭湾の生態系・物質循環」

（世話人：安藤 卓人）

15時半-17時半：一般ポスター発表

26日 09時-15時：エクスカージョン

【参加申込締切】 10月3日（金） 詳細は[汽水域研究会HP](#)まで

## 【主催・共催】

主催：汽水域研究会

共催：島根大学エスチュアリー研究センター

協力：京都大学舞鶴水産実験所

京都教育大学



←大会の詳細  
申込方法  
こちらをチェック

## 舞鶴大会のみどころ

秋田大学の安藤卓人です。昨年度は大会幹事として、皆さまを私がいる秋田にお招きし、充実した大会を開催できました。さて、今年度の汽水域研究会は京都・舞鶴にて開催することにいたしました。私にとってはこれまでご縁のない土地ではありましたが、下見に7月上旬に伺った際に地形や環境・生態系の面白さを学ばせていただき、今は皆さまに必ず楽しんでもらえるであろうと確信しております。昨年秋田に対して、島根大学からは比較的アクセスしやすい場所ですので、ぜひお気軽にご参加いただけますと幸いです。今年は、1日目に総会とシンポジウム・ポスター発表、2日目にエクスカージョンを実施いたします。

大会1日目は、舞鶴港を望む「舞鶴市商工観光センター」の展示交流室にて開催いたします。総会後のシンポジウムは、「若狭湾の生態系・物質循環」と題して、福井県立大学・山田和正先生、京都大学・邊見由美先生、京都教育大学・田中里志先生から、若狭湾の生物や古環境について学ぶ機会といたしました。昨年に引き続き、幅広い専門分野ではありますが、学生の皆さまも自分にかかわる内容もあると思いますので、学びが多いと期待しております。ポスターセッションでは、昨年同様活発なご議論よろしく願いいたします。昨年は学生の発表も多く盛り上がりましたので、今年も是非参加してもらえるとその後は、会場からも近い「いけす料理 卑弥呼 舞鶴」で懇親会を行ないます。舞鶴飯のコース料理を予定しておりますので、お楽しみに。

大会2日目のエクスカージョンは東舞鶴駅から出発し、まずは「京都大学舞鶴水産実験所」に立ち寄ります。車でお越しの方は、舞鶴水産実験所の駐車場が利用できますのでそこからバスにご乗車ください。舞鶴水産実験所には魚類標本の展示がありますので、見学も行ないます。続いて、舞鶴湾を一望できる「五老スカイタワー」に向かいます。近畿百景第1位にも選ばれたという美しいリアス式海岸を眺めながら、参加者同士で語り合いつつ、水圏環境や地形発達史など様々な事象に思いをはせていただければと思います。その後は、由良川河口を眺めながら、メインの目的地である日本三景「天橋立」へと向かいます。まずは、天橋立の北側にある元伊勢籠神社からケーブルカーにて向かう傘松公園から、天橋立が由来となった天に架かる橋のように見える「股のぞき」を体験いただければと思います。天橋立を南側から眺めた写真を多く見ますが、実は北側が股のぞきの発祥地とのこと。各自昼食を挟みまして、希望者は遊覧船にて天橋立によって宮津湾から仕切られてできた内海である汽水域「阿蘇海」を縦断して南側の天橋立駅周辺に向かいます。近くの日橋立や知恩院を散策して、阿蘇海の過去～現在～未来を考えてみてください。そして、舞鶴水産実験所経由で15時過ぎには解散となります。

それでは多くの皆さまのご参加、学会幹事一同でお待ちしております。



写真1:舞鶴湾



写真2:天橋立と阿蘇海

## 汽水域研究の歩みと未来 — 清家泰名誉教授インタビュー

清家泰名誉教授は、1986年に京都大学で農学博士号を取得後、島根大学にて助手から教授までを歴任され、島根大学汽水域研究センター（現・エスチュアリー研究センター）のセンター長も務められました。環境化学種の定量法、水質浄化、窒素サイクルや栄養塩動態、汽水湖やダム貯水池の水環境など、多岐にわたる分野で研究を推進されています。ご退職後も特任教授・客員教授として研究活動を継続され、日本水環境学会汽水域研究委員会委員長として学会の発展にも尽力されています。汽水域は水産資源や生態系にとって重要である一方、環境変化に脆弱な水域です。今回のインタビューでは、長年にわたり汽水域研究を牽引されてきた清家先生に、その意義と今後の展望を伺います。



**Q1：長年の汽水域研究を振り返って、特に印象に残っている出来事や成果、社会への影響は何でしょうか。**

➡ 一番印象に残っているのは「中海淡水化問題」です。国の大規模プロジェクトでしたが、地域住民の反対や有識者の議論を経て中止となり、社会にとっても大きな意味を持ちました。学生時代、指導教授が農水省の受託研究として取り組んでおり、その中で私も「淡水化は好ましくない」という結論に至った経験が強く心に残っています。

研究面では穴道湖・中海の窒素循環を中心に取り組み、定量が難しかったヒドロキシルアミンの測定に成功しました。また、アナモックス細菌の役割を明らかにし、亜酸化窒素（ $N_2O$ ）発生との関係を示したことも印象深い成果であり、地球温暖化ガスの観点から今後さらに重要になる課題だと考えています。

**Q2：現在、汽水域の水環境が直面している最大の課題と、その解決に必要な方向性は何でしょうか。**

➡ 近年の大きな課題は「カビ臭」です。国内の多くのダムや貯水池で発生し、飲料水や水道の安全に直結する深刻な問題です。これまでの発生後の対応だけでは限界があり、気象条件も含めた予測が欠かせません。そのため、AIを活用した発生メカニズムの解明や予測技術の開発が重要です。また、ダム管理や水道事業者との連携など、現場に即した技術実装も求められています。

**Q3：今後、汽水域研究会や研究委員会に期待される役割と、会員へのメッセージをお願いします。**

➡ 汽水域研究委員会を立ち上げたのは、水環境を専門にする研究者であっても、汽水域の実態を十分理解できていない場合があると感じたからです。淡水や海洋に特化した研究は多いものの、その中間にある汽水域を体系的に扱う研究は少なく、その重要性を共有していく必要があります。河川と海洋が別々に研究されてきた中で、汽水域は両者をつなぐ場であり、研究会や研究委員会はその「架け橋」としての役割を担っています。会員の皆さんには、専門を大切にしつつ広い視野を持って研究に取り組んでいただきたい。そうすることで新しい発見や社会への貢献が広がっていくと考えています。

**Q4：最後に、若手研究者や学生に向けて、汽水域研究の魅力や今後の可能性について、メッセージをお願いいたします。**

➡ 汽水域研究は、淡水や海洋の専門を一步広げることで新たな知見が得られる分野です。地域の産業や生活とも深く関わり、成果が社会に還元されやすい場でもあります。若手研究者や学生には、専門性を活かしつつ広い視野を持ち、地域に役立つ研究に積極的に取り組んでほしいと思います。

（インタビュー、撮影：金相暉）

関連学会(大会)・学会誌紹介

◆エスチュアリー研究センター・汽水域研究会 合同研究発表会2025

会期：2026年01月10日～11日 2日間

形式：現地対面

会場：島根大学

詳細：www.esrec.shimane-u.ac.jp

◆日本水環境学会第60回年会

会期：2026年3月09日～11日 3日間

形式：現地対面

会場：中央大学 多摩キャンパス

詳細：www.jswe.or.jp

◆Laguna（汽水域研究）投稿募集中!

- ・Lagunaは、汽水域や湖沼・沿岸域に関する研究成果や情報を共有する学会誌です
- ・投稿内容：論文、総説・解説、短報など
- ・投稿方法：編集委員会宛てに送付
- ・締め切り：投稿は随時受け付け
- ・詳細：www.jaes.shimane-u.ac.jp/?page\_id=31



コラム

変わりゆく汽水域の恵みと未来の工夫

有明海のノリはここ3年ほど不作が続き、宍道湖のシジミも漁獲量の変動が大きく、予測が難しい状況にあります。どちらも地域の暮らしや産業を長く支えてきた資源だけに、その衰えは経済的にも文化的にも大きな痛手です。背景には、気候変動による水温の上昇や降雨パターンの変化があると考えられます。これからの日本は「暑い夏」が常態化し、従来のやり方だけでは立ち行かなくなるでしょう。「仕方ない」と割り切るだけではなく、どう慣れ、どう工夫していくかが問われています。対策の方向性はいくつか考えられます。例えば、新しい養殖技術や水質管理の工夫、流域全体での環境改善など。そして最近では、AIを活用した高度な対策も注目されはじめています。膨大な気象・水質データを解析し、異常の兆しを早期に検知したり、最適な養殖時期や方法を提案したりすることが可能になりつつあります。こうした新しい技術が、地域の知恵や経験と結びつけば、汽水域の恵みを次世代につなぐ大きな力になるかもしれません。また、これまで各地で積み重ねられてきた調査データの中には、まだ十分に活用されていないものも少なくありません。そうした知見を掘り起こし、異なる分野の研究者が力を合わせて融合的に取り組むことこそ、これからの対策には欠かせないと感じます。変わりゆく自然を前にして、私たちは何を守り、何を变えていくのか。これからも研究会の仲間とともに、その答えを探していきたいと思

(情報幹事)

≡ 会員数 (2025年9月1日)

正会員：80名(±0)、賛助会員：4名(±0)、  
学生会員：41名(±0)、計：125名  
#カッコ内は2025年3月31日からの増減を示す

✍ 編集後記

情報幹事として最後のニュースレターとなりました。初めての作成で悩むことも多くありましたが、よい経験となり、多くを学ぶことができました。不十分な点多々あったと反省しております。今後とも汽水域研究会ニュースレターへのご協力をよろしくお願いたします。(金)

汽水域研究会ニュースレター第30号 2025年9月24日発行 編集・発行：汽水域研究会

〒690-8504 島根県松江市西川津町1060島根大学エスチュアリー研究センター内 汽水域研究会事務局

Office. rgbwa@gmail.com 0852-32-6450 (phone&fax)